

SONG: THE STREET BEATS 『親愛なる者』

親愛なる者

なんでもかきかき、たかひく
 なむはたかたかたかたか
 ぼんぼんぼんぼんぼんぼん
 ぼんぼんぼんぼんぼんぼん

なんでもかきかき、たかひく
 なむはたかたかたかたか
 ぼんぼんぼんぼんぼんぼん
 ぼんぼんぼんぼんぼんぼん

一人でたかひく、たかひく
 一人でたかひく、たかひく
 一人でたかひく、たかひく
 一人でたかひく、たかひく

一人でたかひく、たかひく
 一人でたかひく、たかひく
 一人でたかひく、たかひく
 一人でたかひく、たかひく

一人でたかひく、たかひく
 一人でたかひく、たかひく
 一人でたかひく、たかひく
 一人でたかひく、たかひく

一人でたかひく、たかひく
 一人でたかひく、たかひく
 一人でたかひく、たかひく
 一人でたかひく、たかひく

一人でたかひく、たかひく
 一人でたかひく、たかひく
 一人でたかひく、たかひく
 一人でたかひく、たかひく

一人でたかひく、たかひく
 一人でたかひく、たかひく
 一人でたかひく、たかひく
 一人でたかひく、たかひく



You're the only one
 But I can't live without you
 I don't know how to live
 Good-bye

THE STREET BEATS 『LOVE LIFE ALIVE』

こわれたわたしの胸の奥で
 リンリン、リンリンと鳴りひびけよ
 (『夜の風鈴』より)

もう五時をまわっていた。少女たちの姿はすでになかった。地上では濁った朝
 がはじまろうとしていた。夜も、昼も、鎮まることのない街でこの薄明の時刻
 がもっとも寂しいものなのかもしれない。むき出しにされた路上の肌が深い嘆
 声をもたらすようだ。捻じまがった憂暗の、皸裂の、放心の嘆声。
 (『ジェノサイドの街』より)

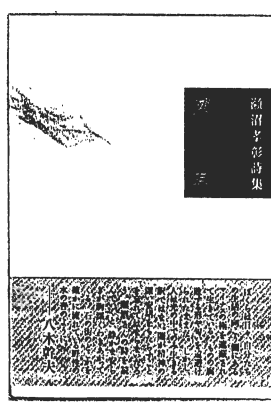
凍えた耳に、アルト・サクスの音色を聞いたような気がした。
 アルバート・アイラー
 彼ならこの場所にきてくれるように思えた。

彼はふたたびサクスに向かった。音は沈むようにゆるやかになり、まるでサ
 ーカスのジンタのように深い音色をかなではじめた。
 それは鎮魂の音楽だった。
 なくなった人を悼むことはすぐに嘘っぽく偽善的なものに堕ちてしまう。
 でも、アイラーは彼等に向けて吹こうとしていた。彼自身が殺されることを選
 んだ人だからだ。
 (『ゴースト』より)

上記に引用したのは、事故で亡くなる2ヵ月前に発行された瀬沼さんの三冊目の詩集『凍えた
 耳』に入っている詩である。
 耳を凍えさせる音ばかりが聴こえてくる現実生活のなかで、路上という定点に立ってじっと耳
 をすませ、凍えを解く音、凍えを解く音楽を聴きつけている瀬沼さんの姿が見えてくる。夜
 の街の風鈴の音、薄明の街の路上の肌の嘆声、アルバート・アイラーのアルト・サクスの音
 色……。詩のなかから、それらが聴こえてくる。
 『ゴースト』のなかで、瀬沼さんは、

「なくなった人を悼むことはすぐに嘘っぽく偽善的なものに堕ちてしまう」
 と書いているけれど、私は、瀬沼さんを亡くなった人として悼むことができない。
 瀬沼さんは、私にとって生前もその詩のなかで生きている人だったから、私の心のなかで生き
 ている人だったから。
 凍えを解く音楽を聴きつけ、凍えを解く詩を書きつけた瀬沼さんの勇敢な生涯。
 私は、これからもずっとそういう音楽を聴きつけていこうと思う。そうすれば、きっと凍え
 るような路上をこれからも歩きつづけていけるにちがいない。

『親愛なる者』(部分)
 胸を焦がす熱い思いだとか
 やまない情熱だとか
 人はいつか失くすと言うけれど
 変わらぬものだってあるさ
 あなたを残し見知らぬ街へと
 長い旅を続ける
 待ってる人がいる 呼ぶ声が響く
 俺達は光の中に飛び出す
 親愛なるあなたにさよならは言わない
 あなたを思う祈りは消えたりしないから
 親愛なるあなたにさよならは言わない
 あなたがくれたすべては消えたりしないから



詩集『凍えた耳』

瀬沼さんも、THE STREET BEATSのØK Iも、私にとって「親愛なる友人」であり、ØK Iが、
 「変わらぬものだってあるさ」と歌っているとおり、それは決して変わることはない。「胸
 を焦がす熱い思い」も「やまない情熱」も決してなくなりはない。
 1月16日のライブでは、「親愛なる者」だけでなく、ほんとうに久しぶりに聴いた「ハッピー
 ボックスをさがして」にしても、ØK Iの歌う歌詞のひとつひとつに心からうなずくことがで
 きたし、とくに、「Sing a song ～くちびるに歌～」を聴いて、「ここが、ここだけが、
 自分がほんとうに生きることのできる場所だ」という想いで胸がいっぱいになった。
 ØK Iの歌を聴いて、長いこと凍りついたままになっていた心が、水面にはった氷が 春の陽で
 溶けていくように溶けていった。
 「夜が君を弱くしようとするけど/心配ないさ 俺は君の味方/冷たい雨 荒れた海 深い霧
 中でも/おまえの顔 見失うことなんてないんだから/Sing, sing a song くちびるに明日へ
 の歌を/終わらないメロディと強い鼓動で」(『Sing a song ～くちびるに歌～』より)と
 歌っているのを聴くほうが、「がんばりなよ」とか「その気持ちわかるよ」とか、面と向かっ
 て 言われるよりも、もっと深く交流できる感じがするし、もっと強くはげまされる。
 これが、歌や詩の力なのだと思う。ØK Iの歌にも、瀬沼さんの詩にもその力がある。

瀬沼孝彰詩集『凍えた耳』：ふらんす堂 (☎ 03-3326-9061) 2039円税

「親愛なるあなたにさよならは言わない/あなたを思う祈りは消えたりしないから」
 1月16日、新宿のパワーステーションでのTHE STREET BEATSのライブで、ØK Iが歌う『親愛
 なる者』という歌を聴いて、1年半前の1996年 8月、交通事故で亡くなられた詩人・瀬沼孝
 彰さんのことを強く思った。

「音楽や書くことは本来ひっそりとした心の暗所から生まれてくるものなのではな
 いだろうか」

これは、1993年12月に出した『同じ瞳をしていた——路上の友への手紙』という小冊子に瀬
 沼さんが寄稿して下さった『路上からの手紙へ』の冒頭の部分である。

1991年12月28日の川崎のクラブ・チャッタでのライブと、その翌年に出た「BEATNIK ROCKER/THE
 STREET BEATS BEST SELECTION 1988-1991」というアルバムをもとに書かれた『路上からの手
 紙へ』は、THE STREET BEATS、とくにØK Iへの深い共感と、自分の内面への深い探求に裏打
 ちされた、瀬沼さん独自の音楽批評である。

瀬沼さんは、このクラブ・チャッタでのライブを、こう評している。

「パワフルなドラムとベースのうねりの奥でØK Iの孤立の影は消え、鋭く尖りな
 がらもあたたかいバイブレーションを与えてくれた。そこにはヒーロー ではない、
 わたしたちに裸の心を向ける一つの温かいバンドがいた。(略) わたしたち
 はあの川崎チャッタという空間で稀有の時間を生きていたと思う」

そして、
 「最近、ロックにふれることが辛くなることがある。弾まない濁いた心に気がつく
 からだ。ストリート・ビーツのような美しいバンドの音楽を聞くことは、わたし
 のようにもうすぐ四十代を迎える者には痛みをとまうことも多い」

と書きながらも、最後は『路上からの手紙』という歌を引用し、

「曲がりくねった道を/誰も歩き続ける/俺はここで歌うよ/今夜おまえにバラ
 ッドを/路上からの手紙を/路上からの手紙をおまえに…
 ストリート・ビーツは今日も路上からの手紙をわたしに届けてくれる。それは生き
 生きとしてあたたかい。彼等にどのような返事を書けばよいのだろう。心の顔
 も、背中の中の荷物も違うが、同じ時代の路上を生きる者として、この親愛なる友人
 たちの音楽にふれ続けていきたいと思う」

と、あたたかく、やさしく、『路上からの手紙へ』を終えている。
 瀬沼さんの詩もみんな路上から手紙であり、「生き生きとしてあたたかい」。

彼方の時間からの使者
 いや、痴れ者のこの路上こそが生み出したのか
 風鈴
 廃墟のように澄みきった風鈴よ (右につづく)

ここに引用した瀬沼孝彰さんの『路上
 からの手紙へ』を再掲載した THE STR
 EET BEATS の小冊子を、デビューから
 10年たった今年中に出す予定です。